

柄澤昭秀 著

## 新 老人のぼけの臨床

中島紀恵子 (北海道医療大学教授・看護福祉学部)

すでにかなり傷んでしまっている初版本(1981年)を傍らに開きながら、このたびの全面改訂された新本を読ませていただいたが、初版本が発行されてから新本発行まで18年間の時間それ自体が、わが国の痴呆における医学・医療、ケアの歩みであるといっても過言ではない。

振り返れば、1978年頃からぼけの人や介護家族の逼迫した状況が次々と明るみにされるようになり、一部の自治体や関係者の組織的取り組みが始まった。私もその端くれにいたが、当時はまだケアの方向に示唆を与えてくれる参考書は非常に少なかった。初版本はそれに応えてくれた数少ない本であり、いまもって私の大事な書物の1つになっている。どうしてだろうと改めて考えてみると、この本が病理学的疾患モデルに己のみている(みてきた)臨床像を当てはめて痴呆を説明しているのではなく、臨床像それ自体の真像を多面的に考究しようとする著者の態度が言葉の行間から読みとれ、それが私のなすべき事の方向性を導いてくれたためだったと思う。

新本は、今日までにこの領域で得られた臨床研究成果の軌跡と痴呆の現状を簡潔明瞭に記載することを通して、痴呆を正しく理解して欲しいという著者の願いがよく伝わる内容になっており、全9章のどの章も初版に比較して、新しい知見が加えられている。著者自身が序文にいうように、最近の多数の研究書や解説書の出版物とおびただしい情報に、多くの関係者はかえって混乱してしまうような経験をしている。こうした現状に気付いている方々には、ぜひ読んで欲しいと思う。看護職にとっては、特に2章

の知能の老化と痴呆、3章の痴呆の疫学と実態、4章の痴呆の臨床像、7章の治療とケアに関する新知見が参考になるだろう。なにも章を追って読まなくてもよいと思う。知りたいと思うところを噛みしめつつ読み、まだ正しいことなのかどうかかわからないものをみつめる時の著者のきちんとした目の置き方に関して学ぶことも、楽しい読み方のひとつではあるまいか。

各章の随所にメモとして書かれた26項目のどれもが、本文のその場所になくはない短文として配置されている。図表もよく精選されており、全体として丁寧に編集されているのもよい。

看護領域にいる一人として新本を通読し、痛感したことがある。それは、治療看護に対するわれわれの世界のこだわりのなさに対する反省によるものである。自分達の痴呆の人へのケアに基づく行為が、単に日常ケアとか、一般的な健康管理といった言葉でくくられる行為ではないと考えているのなら、その行為がどんな治療的意図とプログラムによってなされた行為かを記述する必要がある。また、成果を示していくことにおいて組織的に進めていかなければ、看護職の他の領域の「療法家」に“心地よい居間”を提供するだけの人材になってしまうだろう。むしろ、患者、利用者に心地よい環境を作るためのケアの追求こそが看護の本質といえるものである。ならば、それを意図した治療看護へのアプローチのもとで、意図的にプログラムを開発し、記述することがより一層重要なことだと痛感した。

(A5 頁184 2,600円+税 1999 医学書院刊)